

# 新聞記者体験を通じて地域の子どもたちの郷土愛を育む シティズンシップ教育 —ローカル新聞社と連携した子ども記者クラブの実践を通して—

橋本 祥夫・滋野 浩毅・木田 竜太郎  
京都文教大学

## 【要 約】

小学校・中学校・高等学校における地域学習が、実際に学び、生活する地域における課題把握や地域参加といった地域への関心に結びついているかどうかは、これまで十分に検証されていない。むしろ、地域の子どもたちは、学年が進むにつれ、地域活動への参加が減る傾向にある。

本研究では、「郷土愛」を、「地域について理解するとともに、地域の課題を認識し、地域社会の一員としてそれを「自分事」と捉え、「何をすべきか」「何ができるか」を考え、行動に結びつける資質」と定義し、シティズンシップ教育として「郷土愛」をどのように育むことができるのかを検証する。具体的には、ローカル新聞社と連携した子ども記者の活動を通して、地域に対する理解を深め、郷土愛を育むことができるのかという検討を試みた。

子ども記者クラブは、京都府南部地域の城陽市と宇治市に開設し、城陽市の小学生を対象とした「城陽子ども記者クラブ」と宇治市の小学生を対象とした「宇治子ども記者クラブ」の2つを設定する。両市とも、京都市近隣にあり、ベットタウンとして発展してきたが、近年高齢化が進み、市民活動は停滞気味である。そこで、それぞれの地域の特色を生かしたまちづくりを現在推進している。新聞記者体験を通して地域のことを理解し、将来の地域の担い手を育成したい。

研究方法としては、質問紙調査や聞き取り調査、活動の様子の参与観察および作成された記事などの成果物を見ることによって、生活地域における課題把握や活動参加といった地域への関心がいかに育まれ、そのような体験が「郷土愛」の醸成・涵養がいかに結びつくかの検討を試みる。

【キーワード】 シティズンシップ教育・NIE・郷土愛・新聞記者体験・社会参画

## 1 はじめに

改正教育基本法の教育の目標に「郷土愛」が示され<sup>1)</sup>、地域学習が各地で盛んに行われている。しかし、「郷土愛」とは何か、それを育むにはどのような手立てが必要なのかは十分に検証されていない。

また、小学校・中学校・高等学校における地域学習が、実際に学び、生活する地域における課題把握や地域参加といった地域への関心に結びついているかどうか検証できていない。むしろ、地域の子どもたちは、学年が進むにつれ、地域活動への参加が減る傾向にある。

京都府南部地域は、高度経済成長期に人口が急増した地域が随所に見られ、年齢構成の急速な変化による高齢化ばかりでなく、地域のアイデンティティや郷土愛を次世代に伝え、新しい地域の担い手を育成することが課題となっている。

本研究では、「郷土愛」を「地域について理解するとともに、地域の課題を認識し、地域社会の一員としてそれを「自分事」と捉え、「何をすべきか」「何

ができるか」を考え、行動に結びつける資質」と捉え、上記のような課題に基づき、地域の新聞社と連携した「子ども記者クラブ」の活動を通して、郷土愛をいかに育むことができるのかを検証する。

## 2 研究の概要

平成26年度文部科学省「地（知）の拠点整備事業」（大学COC事業）に、京都文教大学が申請した「京都府南部地域ともいき（共生）キャンパスで育てる地域人材」が採択された。本事業では、大学のリソースを地域発展に、また地域のパワーを大学教育に活用し、大学と地域が共に生かしあい、共に生き生きする「ともいき（共生）キャンパス」の創造を目指している。

本事業では、地域を志向した共同研究を行っている。本研究は、京都文教大学と城陽市市民活動支援センター、洛南タイムスの3者による「住民参画型」の共同研究として実施している。

「住民参画型」の共同研究とは、地域住民ととも

に地域ニーズを汲み取り、地域住民が主体となり地域課題に取り組む研究として設定している。

本研究では、地元紙である洛南タイムスの協力を得ながら、「子ども記者」として、地域に出向き、取材した記事を洛南タイムス紙面に年間を通じて掲載する<sup>2)</sup>。

市川(2013)は、子どもの新聞記者体験の意義として、「本物」に出会う意義の重要性を指摘する<sup>3)</sup>。本物の記者の助言や励ましは学びの動機づけになるとともに、見出しの付け方、写真の撮り方などの専門的な助言や指導を受けることができ、子どもの意欲が高まる。

子ども記者クラブは、京都府南部地域の城陽市と宇治市に開設し、城陽市の小学生を対象とした「城陽子ども記者クラブ」と宇治市の小学生を対象とした「宇治子ども記者クラブ」の2つを設定する。両市とも、京都市近隣にあり、ベットタウンとして発展してきたが、近年高齢化が進み、市民活動は停滞気味である。そこで、それぞれの地域の特色を生かしたまちづくりを現在推進している。新聞記者体験を通して地域のことを理解し、将来の地域の担い手を育成したい。

ロジャー・ハート(2000)は、子どもが地域を取材して新聞づくりをする意義について「社会を変えていくことに真剣に関わりたいと望んでいる子どもにとって、素晴らしい訓練の場となるだろう。」と述べている<sup>4)</sup>。

新聞記事を書くことによって、社会を見つめ直し、社会参画の意欲が高まっていく<sup>5)</sup>。中(2006)は、市民性の育成のためには、自らがメディアを創造し、社会に対してコミュニケーションを開いていくという観点から、新聞記事を作る経験が不可欠であると主張している。また、そのための取材活動は、「対話」の価値をつかみとり、社会をつくりかえていく「市民」を育てる作業であると述べている<sup>6)</sup>。

### 3 研究の概念枠組み

本研究では、「郷土愛」をシティズンシップ教育の視点で考える。市民性教育として、シティズンシップ教育が世界で注目されている。シティズンシップ教育は各国で様々な取り組みがされており、その捉え方も様々だが、いち早くナショナル・カリキュラムに取り入れた英国のシティズンシップを基に、本研究の「郷土愛」について考察する。

英国のシティズンシップ教育の特徴的な要素に「ストランド」(ユニットの構成要素)と「エレメント」(授業要素)がある。

ナショナル・カリキュラム(2008)では、「効果的なシティズンシップ教育のための三つの原理」<sup>7)</sup>として、「社会的道徳的責任」「地域社会への関わり」「政治的リテラシー」の3つのストランドが示されている。シティズンシップ教育の全体は、3つのストランドで構成されたユニットの構造体である。

本研究は、シティズンシップ教育の3つのストランドのうち、「地域社会への関わり」を重点化した取り組みである。「地域社会への関わり」のストランドのユニットの1つとして「郷土愛」を設定し、「郷土愛」ユニットについて構想した。ユニットは、「価値と性向」「技能と才能」「知識と理解」の3つのエレメントがあり、互いのエレメントは関連しあっている(表1)。

#### (1) 価値と性向

##### ① 共通善への関心

子ども記者として取材する対象は、地域に愛着を持ち、努力している人々である。仕事や立場が違って、地域の発展を願う思いは共通しているところがある。取材活動を通して、そうした共通善に気付かせる。

##### ② 共感的理解を伴った協働や他者のための協働への性向

地域の人たちが連携し、協力している姿に共感し、自分も地域の一員としてできることをしてみたいという意欲が持てるようにする。

表1 「郷土愛」ユニットのエレメント

価値と性向	技能と才能	知識と理解
<ul style="list-style-type: none"><li>・ 共通善への関心</li><li>・ 共感的理解を伴った協働や他者のための協働への性向</li><li>・ 事実を照らして自分自身の意見と態度を変えることへの開かれた意思</li><li>・ 個々人の自発性と努力</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 口頭と筆記の両方で論理的に議論する能力</li><li>・ 他者の経験と見解について熟考し、その価値を認める能力</li><li>・ 他者の視点に寛容である能力</li><li>・ 問題解決アプローチを発展させる能力</li><li>・ 情報を発信するためにメディアを用いる能力</li><li>・ 一つの証拠を鵜呑みにしない証拠への批判的な接近と新鮮な証拠を探す能力</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・ 時事的、今日的な問題</li><li>・ 機能と変化に富むコミュニティの性質</li><li>・ 個人と地域共同体との相互依存</li><li>・ 個人と共同体が直面する社会的変化の性質</li><li>・ 個人と共同体に関連する経済的なシステム</li></ul>

(水山光春(2011)「シティズンシップ教育カリキュラムを構想する視点」研究代表者水山光春『英国市民教育の批判的摂取に基づく小中高一貫シティズンシップ教育カリキュラム開発』, p.11. を参考に、本研究に当てはめて筆者作成)

### ③ 事実に照らして自分自身の意見と態度を変えることへの開かれた意思

取材活動を通して、地域の見方が変わったり、新しい発見をしたりすることがある。固定観念に縛られることなく、地域を見る目を育てる。

### ④ 個々人の自発性と努力

地域の人々が様々な活動や仕事をする中で、どんな創意工夫や努力をしているのかを捉える。さらに、なぜそのような工夫や努力が必要なのか、その背景も捉えさせる。

## (2) 技能と才能

### ① 口頭と筆記の両方で論理的に議論する能力

取材したことを記事にする際に、話し合いを通して、何が重要か、何を伝えたいのかを明確にする。また、記事を書く際には、簡潔にわかりやすく伝えるにはどうすればいいのかを考えて書く。特に、どんな見出しにすればいいのかを考えることによって、伝えたいことが明確になる。

### ② 他者の経験と見解について熟考し、その価値を認める能力

インタビューを通して、その人が伝えたいこと、大切にしていることなどを感じ取り、その価値観を共有する。直接インタビューをすることによって、話の内容だけでなく、表情や話し方、またその場所（仕事場、活動場所）の様子からもそれらを読み取ることができる。

### ③ 他者の視点に寛容である能力

子どもと大人という世代の違い、住んでいる場所や経験、立場の違いなどから、感じ方や受け取り方が違う。取材活動による様々な人との出会いにより、多様なものの見方や考え方を理解できるようにする。

### ④ 問題解決アプローチを発展させる能力

取材対象の人は、様々な困難の中で努力して状況を打破してきている。取材活動を通して、様々な問題解決のアプローチを学ぶことができる。

### ⑤ 情報を発信するためにメディアを用いる能力

本取組の特徴は、書いた記事を一般紙である洛南タイムスに掲載してもらえることである。自分の考えを地域の多くの市民に伝えることができる。広く一般市民に自分の考えを伝えることができるので、その分責任も生じる。メディアの役割についても考える機会となる。

### ⑥ 一つの証拠を鵜呑みにしない、証拠への批判的な接近と新鮮な証拠を探す能力

取材をするときには、「宇治橋通り商店街は観光客を呼び込むためにどのような工夫をしているの

か」など、問題意識をもって取材をする。その答えは一つとは限らない。取材活動を通して、その答えとなる証拠を探すことになる。

## (3) 知識と理解

### ① 時事的、今日的な問題

地域社会の様子は時代とともに変わる。どのような変遷を経て現在に至ったのかという歴史的経緯を理解することは、その地域の特徴を理解するために重要である。その上で、現在どんな問題を抱えているのかを考えることが大切である。

### ② 機能と変化に富むコミュニティの性質

コミュニティによって様々な機能や性質がある。そうしたことを理解することが地域を理解することになる。記事とともに、見出しを考える。この見出しが、「その場所はどこなところか」を端的に表す言葉となる。

### ③ 個人と地域共同体との相互依存

個人は地域共同体の中で生かされ、個人が地域共同体を活性化するという相互関係があることを理解する。

### ④ 個人と共同体が直面する社会的変化の性質

地場産業は、地域の環境の変化に左右される。長年続くからそれが伝統となり特色となるが、それを維持するのは大変なことである。また、伝統を守るだけでなく、そこから新たな特色を打ち出していくことも大切である。そうした地域の社会的変化を捉えさせたい。

### ⑤ 個人と共同体に関連する経済的なシステム

地域経済が活性化しないと地域の発展はない。経済的なシステムに注目することによって、地域の特色を生かして、そこで働く人々はどのような工夫や努力をしているのかを捉えることができる。地域経済の理解なしに地域を理解したことにはならない。

## 4 研究の方法

本研究においては、まず、質問紙によるプレ（事前）時点での調査を行う。次に、「子ども記者」としての実際の活動の様子に関する聞き取り調査を実施する。結果的に今回は、個別のフォローが十分可能な人数（計10人）を対象とするため、この参与観察および作成された記事などの成果物を見ることによって、生活地域における課題把握や活動参加といった地域への関心がいかに育まれ、そのような体験が「郷土愛」の醸成・涵養にいかに関わりつづけるのかを検討を試みる。最後に、ポスト（事後）段階における質問紙調査を行うことにより、「子ども記者」の活動を通して、地域に関する理解や意識にどのよう

な変容が見られるのかを分析する<sup>8)</sup>。

## 5 城陽子ども記者クラブの実践

### (1) 城陽子ども記者クラブの概要

城陽子ども記者クラブは、城陽市市民活動支援センターの管理運営を城陽市から受託している市民活動の中間支援団体「おりなす、キャンプ、城陽」が2015年度事業として城陽市に提案したセンター事業としての「子ども記者クラブ」がきっかけである。地域の子どもたちが高校、大学へと進学するのに伴い、地域活動への参加が減少するという現実に対し、子どもたちの郷土愛を育むために、新聞づくりを通じて子どもたちが地域のことを知るとともに、地域への関心や参加を親世代へと広げることが目的である。この事業を実施するにあたって、地元ローカル紙である洛南タイムスに取材や原稿執筆のアドバイスを受けることを事業の「目玉」とした。

城陽子ども記者クラブの特徴として、予め取材テーマが決められていることと、同じ学校に通う子どもが多く、お互い仲が良かったため、2〜3人単位のチームで新聞記事を作成することがある<sup>9)</sup>。

### (2) 城陽子ども記者クラブの子どもへの聞き取り調査

#### ① 実施日・実施場所

- ・日時 ①2015年10月31日  
②同 11月23日
- ・場所 ①京都文教大学講義室  
②城陽市市民活動支援センター
- ・インタビュアー 滋野 浩毅
- ・対象児童 城陽子ども記者クラブ参加児童7人(A〜G児)

#### ② 対象児童のプロフィール

A児は、小学校6年生の女子児童である。A児の住んでいるところは城陽市の中西部に位置する地域であり、そのほぼ中央を近鉄京都線が南北に貫いている。活動場所である寺田コミュニティセンターならびに城陽市市民活動支援センターの入る公共施設「文化パルク城陽」までは徒歩圏内である。なお、A児からF児までの6人は同じ小学校に通っている。

B児、C児、D児、E児、F児は、小学校5年生の女子児童である。A児からF児までは同じ小学校ということもあり、「城陽子ども記者クラブ」にも同時に申し込んでおり、常日頃から交流があることが窺える。

G児は、小学校5年生の女子児童である。G児の住んでいるところは城陽市の南西部、近鉄京都線の西側に位置する地域で、南側には木津川が流れてい

る。なお、A児からF児とは異なる小学校に通っており、「城陽子ども記者クラブ」には6月の開始時に遅れて7月の追加募集時から参加しているが、現在では、他の子ども記者たちともすっかり打ち解けている。

全5回実施した子ども記者クラブのうち、A児、D児、G児は5回とも（但しG児の初回は他の児童とは異なり、およそ1ヶ月後に実施した追加募集者の説明会からの参加）、B児、C児、E児、F児は4回参加している。

#### ③ インタビューの記録（一部抜粋）

Q1 子ども記者クラブに参加して良かったことは何ですか？

B・C・F 知らなかったことがわかったこと。

A（第2回取材の）パル祭のときも、いつもなら興味がなくてスルーしていたことも、インタビューすることで、知らなかったこともわかったし、（第3回取材の）イチジクのことも、「実の中に花できる」といった知らなかったことについても知識が増えたと思う。

E いろんなところに行って体験できたこと。

G 体験してみて「これいいな」と思った。（第2回「城陽パル祭」取材時にイベントブースにあった展示物の）葉っぱで、いろいろなものが作れるし、そういうことは知らなかったし、自分でも作ってみたいなあとか、今日（第4回京都文教大学学園祭「指月祭」取材）やったら、いろいろ「これつくってみたいな」と思ったし、興味があふれてくる。（取材のために）見ていたら「これどうやって作るんだろう？」という疑問が出てきて、それを取材することで、どんどんわかってくるし、興味がわいてくる。D 新聞の書き方がわかって、学校で新聞を書くときに役立っている。新聞を作るときに、どういう構成をしたら面白いか考える。

Q2 子ども記者クラブに参加して自分が成長したと思うことは？

B・C・E・F 人に話を聞けるようになった。これまでは人にあんまり話すことはできなかった。

G 思いやりの心を持ってきた。（第4回取材で説明してくれた）大学生はレベルが高いし、やさしいし、説明の仕方もわかりやすいから、そういうところを見習ってやっていきたいなあと思った。

D 書くことがうまくなった。これまで作文のある日は学校休みたくなっていた。何から書けばいいかがわからなかったから。

A 学校の国語の時間に、記事を書くときと同じように付箋を使って構成を考えた。取材をする力がつ



いたのかどうかはわからへんのだけど、ちゃんとした文に仕上がったりすることがわかった。

G これまでは、文章と書くのはあんまり得意じゃなかった。それから感想とか説明とかがうまくいえなくて。でも取材をしていく上で、感想を書いたりしていくからどんどん慣れてきて、(子ども記者の経験)を学校でも活かしている。

Q3 自分の住んでいる地域について子ども記者の経験を経て見方が変わったことはありますか？

A 最初(第1回時に実施したワークで)「城陽のことどう思ってますか？」というのがあったけど、そのときは、城陽は田舎か都会かわからないし、住んでても、城陽のいいところはあんまりはっきりとわかっていなかったけど、やっぱり(第2回の)パル祭とか、(第3回の)イチジクのことに関しても「城陽はこういういいところがあるんだな」っていうのを改めて感じたし、また、城陽にはこういう団体もあるんだということもわかるようになった。

F これまで城陽にはあんまりいいところがないと思っていたけど、特産物とか作るためにもいろんな人がかかわっていることがわかった。

B 城陽(全体)のことはわからへんけど…今日見に行った橋(第5回取材の新名神高速道路工事現場)を作っているところや、イチジクのスムージーの作り方がわかった(第3回イチジク取材)。

・これまで意識しなかった？

E (郷土のことより) お店やブランド品の方が興味あった。

D (城陽は) 超田舎でつまんね、と思っていた(けど、それが少し変わってきた)。

D・E 大阪とかはいっぱいお店があって、ファッションもかわいいから、大阪とかに住みたいと思っていたけど、城陽も自然がいっぱいあって、なかなかええやんと思えてきた。

G (城陽に) 興味がどんどんわいてきて、これまでだったら「こんなんやってんのや」ぐらいで通り過ぎていたけれど、「何なんやろ？」みたいな関心を持ったり、そういうことがわかってきたら「これってこんなんなんや」ってお母さんとかに話したり、「こんなんはこんなんできてるらしい」って自分にも活かせるし、人にも話せるからいいと思う。

・お母さんにそういったことを話すと関心を持ってもらえる？

G お母さんに(子ども記者クラブに行ったことを)話したら「どうやった？」って聞かれて、(取材のことを)話したら「お母さんも大学行ったことない

からどんなか見てきてな」っていわれた。それで帰ってきて話すと「へえ～」って驚いて、びっくりしたこともあった。

## 6 宇治子ども記者クラブの実践

### (1) 宇治子ども記者クラブの概要

活動場所は京都文教大学サテライトキャンパス宇治橋通り(以下サテキャン)である。大学と洛南タイムスを通じて広報するほか、宇治市内の小学校にポスターを掲示する。その日のうちに、取材の仕方や記事の書き方を新聞記者から教わり、取材に行き、記事を書く。活動は1回で完結する。取材先は毎回変わり、サテキャンから徒歩圏内の所に取材に行く<sup>10)</sup>。

### (2) 宇治子ども記者クラブの子どもへの聞き取り調査

#### ① 実施日・実施場所

・日時 2015年10月31日

・場所 京都文教大学小会議室

・インタビュアー 橋本 祥夫

・対象児童 宇治子ども記者クラブに複数回参加した児童3人(H～J児)

#### ② 対象児童のプロフィール

H児は、小学校5年生の男子児童である。H児の住んでいるところは宇治市内の山間部であり、活動場所であるサテキャンまでは車で30分ほどかかる場所にある。母親がいつも送迎している。

I児は、小学校6年生の男子児童である。I児の住んでいるところは宇治市内の中心部にあり、サテキャンまでは車で10分以内の場所である。自転車であって来る。

J児は、小学校6年生の男子児童である。J児の住んでいるところは宇治市近郊の宇治田原町にある。宇治田原町も宇治茶の栽培、生産が盛んな場所であり、宇治市ではないが、宇治地域といってよい場所である。父親がいつも送迎している。叔父が新聞記者(洛南タイムスとは別のローカル新聞社)であり、洛南タイムスもよく読んでいる。

3人とも、子ども記者クラブには4回中(調査時)3回参加している。

#### ③ インタビューの記録(一部抜粋)

Q1 なぜ子ども記者クラブに応募したのですか？

H 新聞が好きで、読んでいても世の中のことがいっぱい書いてあって、とても面白かったから。自分でも新聞を書いてみたいと思って、行ってみたらとても面白かった。何回も取材したいと思ったから。ここに来ました。

・何年生から新聞を読み出したの？

H 4, 5年生くらいから。

・読みだしたきっかけは何かあったの？

H お母さんが新聞を読んだら世の中のことがいっぱい書いてあって面白いよと言って。初めはあまり興味がなかったけど、読みだしたら、世の中のことがいっぱい書いてあって。毎日読んでないけど、たまに読んでみても面白いし。いっぱい面白いことが書いてあって。

I 初めはチラシを見て、面白そうと思って。やってみようかなと思って。やってみたら取材とか面白かった。取材とかできんのかな思ったけど、できて。文章も書けたし。

・どこが面白そうと思った？

I 自分で新聞書いて、それが載るのが。

J 小学校2年生の時に父さんに読んでみたらと言われて。いろんな新聞読んでみたら面白くなって、洛南タイムスも読んでいて。やってみたら、すごく書いたり取材するのが楽しかったから、何回もやってみようと思った。

Q2 これまで何回も参加してくれているけれど、この子ども記者クラブは何が一番の魅力なのですか？

I 1回行って、次も行こうかなと思った。

・一番面白かったのは。

I 取材していろんな人と話をしたりいろんな話を聞いたり。

J 取材して新しいことを聞いて。それを言葉に表すのが楽しい。

H 知らない人にインタビューしたり、普段は先生とかしかしゃべらないから、知らない人とか大学生とか、あまり馴れ馴れしくない人に話したりとかして聞いて書くのが面白かったのと、文章書くのが上手になったのもよかった。面白かったしうれしかった。

Q3 子ども記者クラブの活動をして、自分のためになった、力になったと思ったことは何ですか？

I 文を書くのが上手になった。

J 知らない人に話しかけるのができるようになった。

H 文章書いたり知らない人としゃべったり、言葉の使い方とか文章の使い方が上手にできた。

Q4 子ども記者クラブでは宇治のことを取材して記事に書いたけれど、自分たちが住んでいる宇治という地域の見方や考え方は変わりましたか？

I 前から宇治橋通り商店街とか行っていて、こんな感じかなと思ったけど、通園さんとか朝日焼さん

とか宇治を代表するような人たちに話が聞けて、印象が変わった。こういう人に支えられているんだな。

J 宇治って歴史とか深くて、外国人とか観光客が来やすいように頑張っている人がたくさんいることが分かった。

H もともと宇治は歴史があって、お茶も有名だし、いいところだと思っていたけど、実際に取材してみても、宇治市のことで、この店があってここはこういうことだよとか、こんな人に支えられていることは知らなくて、宇治について取材したとこだけけど、印象が、こんな人に支えられているというように変わりました。

Q5 自分の書いた記事を読んだ家の人や周りの人の反響はどうでしたか？

I 友達とか近所の人とかに「記事書けてすごいな」とか「取材してすごいな」とか言われた。言われてうれしい。

J 友達のお母さんたちに「載ってたね」といっばい言われている。

H 取材して「ここ良かったよ」とか、「ここに目をつけて良かったよ」とか、周りの人に言われて。「こうしたら良かったね」とか言われたら、次はなおしたり、こうしようとか思った。

## 7 考察——新聞記者体験を通じての子どもたちの変容

### (1) 城陽子ども記者クラブの子どもの変容

A児は、責任感が強く、唯一の6年生ということもあり、リーダー的存在である。最初は城陽に対して漠然としたイメージしか持っていなかったが、子ども記者として取材、原稿執筆を重ねる中で、地元城陽への理解を深めるとともに、文章構成のスキルを身につけたことを実感しているようである。質問紙の中での主張はプレとポストで一貫しているが(遊ぶ場所の少なさを嘆いている)、もともと地域の行事や活動によく参加する家庭環境で育ち、城陽に対する自身の愛着も強い。活動自体の満足度も高かったようである。

B児は、インタビューではあまり多くの回答を引き出すことはできなかったが、インタビュー内容やポスト調査の記述からは、参加した回についての感想や自然の豊かさについての言及など、個々の事象に関心を高めたといえる。質問紙の中では7人中唯一、「城陽市が好きですか？」の問いに一貫して「いいえ」と回答している。但し、ポスト段階では、環境破壊に対する公憤めいたものをのぞかせており、

愛着の裏返しとも取れる。

C児は、インタビューがB児とともに別日の実施となったこともあり、B児と同調するようなコメントが多かったが、ポスト調査において「自分たちの知らないことをインタビューしてわかったりしたし楽しかった」と書いてあることを見ても、自分の中で得ることはあったと読める。さらに、プレ時点では「城陽市が好きか」の問いに「分からない」と答えていたが、ポスト段階では「はい」と回答している。活動を通して、郷土への愛着が増したものと捉えられる。

D児は、大都市へのあこがれの強さは子ども記者を始めた当初と5回経験した後とでは大きな変化は見られないが、それでも城陽について少し関心を持ち始めたことがインタビューから窺える。また、記事作成を通じて、文章力の向上を実感しており、学校生活でもそれを応用していることがわかった。なお、プレ時点で「大人になっても城陽市に住みたいと思いますか?」の問いに「いいえ」と答えていたが、ポスト段階では「分からない」と回答している。C児同様、郷土への愛着度の好転と見るべきではなからうか。

E児は、D児同様、やはり、郷土の魅力より大都市の流行の方が気になるようだ。取材でのインタビュー経験を通じて、他人に対し、物怖じせずに質問することができるようになった。なお、E児についてはポスト調査を実施できなかったが、プレ時点で「城陽市が好きか」の問いに「はい」と回答している。

F児はおっとりしているが、想像力豊かである。そのことは、取材対象にある背景に言及できることや、ポスト調査の質問項目「(城陽で) 一番説明したい「良い」「好きな」ところを教えてください」という質問に対して、見たことや聞いたことから想像をふくらます回答をしていることを見てもわかる。また、E児同様、他人に対し質問できるようになったことも成長である。加えて、プレ時点で「大人になっても城陽市に住みたいか」の問いに「いいえ」と答えていたが、ポスト段階では「はい」と回答している。C児、D児と同様、郷土への愛着が深まったものと評価できよう。

G児は先述の通り、ただ一人別の学校から来ており、また7月の追加募集時からの参加であるが、その後全回参加している。また、好奇心旺盛で何事にも意欲的である。このことは取材時間外であっても、気になる所には一人ででも出向き、聞き取りを行っている姿を幾度となく目にしたことからもいえ

る。

取材に比べ、記事執筆の方はまだ若干苦手意識があるようにも思えるが、取材した内容をできるだけ詳しく文章にしていこうということが取材原稿から読み取れる。例えば、1回目の介護者の会の取材では、「私のおばあちゃんもお手伝いをしないとイケないので、こういった分り合える会があったらいいなと思いました。」と自分目線で書いている。しかし、2回目のイチジクの生産農家の取材では、「みなさんを笑顔にできる井上さんはすごいな、と思いました。」と書き、3回目の高速道路の取材で、「私たちが安心して使うために大変なことを頑張ってくれているんだと改めて思いました。」と書いているように、市民の目線で、どういう貢献をしているのかを考えることができている。

質問紙調査においても、城陽に対する愛着度のもととの高さに加え、取材を通して「ゆうな名物がいっぱいある」ことを知り、郷土への誇りをますます高めた様子が窺える。

城陽子ども記者の児童共通で見られたのは、「わがまち城陽への理解」である。城陽市は隣接する宇治市や、周辺の京都市や奈良市のような有名な観光資源もなく、全国的な知名度を持つ特産品もないと思われている(実は全国的シェアを持つ特産品や産業はあるのだが)。かつ鉄道、道路共に大都市部へのアクセスが良いため、インタビュー発言や質問紙調査で見られたように大阪や京都といった大都市に強いあこがれを持つ一方、城陽にこれといった特徴を見いだすことができず、興味を持たない傾向がある。それが自分たちで城陽の特産品や人、身の回りのことや現在の動き等を取材し、記事を書くという経験を通じて、少なくとも地域の魅力を見いだすことにつながっているし、それを文字や言葉で表現できるようになってきている。さらに、プレ時点では「城陽市が好きか」「大人になっても城陽市に住みたいか」の問いに、「いいえ」ないし「分からない」と答えていた児童4人中3人が、ポスト段階では郷土への愛着度の好転と見るべき回答をしており、「子ども記者」の活動を通して、少なくとも一定程度の「郷土愛」が育まれたものと評価できよう。

## (2) 宇治子ども記者クラブの子どもの変容

H児は、口数は少ない子どもだが、質問したことにはしっかり答えてくれ、自分の考えはしっかり持っている。「ぶらぶら歩いて興味のあるものを見つける」ということがなかなかできず、取材時間が半過ぎたあたりから「今まで歩いていて興味を持ったものがない」と言って、焦っている様子が毎回窺え

る。「こういうのは?」「お店を取材とかでなくても、風景のことや人とかでもいいんだよ。」と周りのスタッフが提案しても、しっくりこない様子をしていて。また、取材対象を決めても、もともと用意している質問項目が少なく、会話する中で生まれてくる自然な質問もなかなか出てこない。こうしたことから、「新聞記事の取材とは、こういうことを書かなければならない」というような取材対象・質問項目への固まったイメージがあるようだった。しかし、何回も参加している状況から、活動自体には満足している。また、記事を読んだ人の感想を気にしている様子から、もっと上手に取材をしたり記事を書いたりしたいという思いを持っていることがわかる。

1回目の記事の見出しは「いろんなお店の宇治橋通り」だったが、2回目の記事の見出しは「お茶の香りがすごい平等院表参道」となっている。違う商店街ではあるが、商店街の取材において、一度取材を経験したことによって、特徴を捉えることができるようになっていく。

質問紙調査から見える傾向としては、プレ時点では郷土（宇治市）に対する認識が「おちゃがおいしい」程度にとどまっていたところ、ポスト段階に至って「知っている町のこと（様子）」を話したいと答えるなど、郷土への理解の深まりが窺える。

1児も口数は少ない子どもで、自分から積極的に話さないが、聞かれたことにはしっかり答えており、自分の考えはしっかり持っている子どもである。インタビューでは、初めはマニュアル通りの質問しかできなかったが、2回目からは、自分の今まで見聞きしたことと合わせつつ、自分で考えた質問もできていた。保護者の話では、家では子ども記者の活動のことをよく話しているらしい。

1回目の記事の見出しは「工夫のつまった商店街」だったが、2回目の記事の見出しは「茶と歩んできた朝日焼」となっている。見出しを比べてみると伝えたいことがより明確になっていることが分かる。

質問紙調査から見える傾向としては、プレ時点で「宇治市の「良い」「好きな」ところ」という設問に複数回答しており、ポスト段階の感想でも「宇治のことも学べるのでとてもいい」と答えるなど、郷土への理解と愛着が窺える。

J児は、新聞記者をしている叔父の影響からか、新聞をよく読んでいて、新聞に関する知識も多い。洛南タイムスもよく読んでいて、宇治に関する情報もよく知っている。取材では、自分なりのこだわりがあり、他の人とは違うものを見つけたいという意欲が感じられる。ニュースを見つけたいという、ま

さに「記者の目」を持っている。毎回同行する洛南タイムスの記者とも仲良くなり、記者から積極的に様々なことを学ぼうとしている。取材では、いろいろなものをもらったり食べさせてもらったりすることがあり、取材を楽しんでいる。子ども記者クラブの活動が気に入って、城陽子ども記者クラブにも参加したいという意向を持つようになった。

記事では、「驚いた」という言葉をよく使う。1回目の記事では「いろいろな取り組みがしてあって驚いた」、2回目の記事では「食べてみると、小松菜よりおいしくて驚いた」、3回目の記事では、「宇治田原にはない大きな散茶機があって、驚いた」となっている。驚いた理由もより具体的になっており、「記者」として何を伝えたいのかが明確になってきている。

質問紙調査から見える傾向としては、I児同様、すでにプレ時点で郷土に対する一定程度の理解をもっており、ポストの段階でも「あなたが一番話したいことは?」の問いに、「宇治市の人は人柄がいい」と答えるなど、記者としての活動を存分に楽しんだ様子が窺える。

宇治子ども記者クラブに参加した児童は新聞に関心があり、保護者も熱心である。どの子どもも一番楽しいと感じる活動は取材活動だった。もともと積極的ではなく、コミュニケーションをとるのが得意とはいえない子どもでも、取材活動を通して、様々な人と話をするのが楽しくなっていた。インタビューは、初めはしり込みしているが、慣れてくると自分から話しかけることができるようになる。子どもたちも自分の変化、成長を実感している。記事を書くのは苦労していたが、自分が書きたいこと、伝えたいことがあり、時間が経っても粘り強く取り組んだ。プロの新聞記者から指導を受けられることも記事を書くモチベーションにつながっている。自分が書いた記事が新聞に載ることにより、周りの反響があり、それが次の参加の意欲につながっている。また、地域を取材して記事を書くという経験を通じて、地域の魅力を見いだすことができるようになった。

一方、質問紙調査から見える傾向としては、プレ時点で、すでに郷土に対する一定の理解を有する「意識の高い」子どもが集まっていることから、ポスト段階における「郷土への愛着度」など内面的な変容は、却って見出しにくかったといえる。

## 8 成果と課題

本研究では、ローカル新聞社と連携した子ども記



者の活動を通して、地域に対する理解を深め、郷土愛を育むことができるのかという検討を試みた。「子ども記者」の活動は他の新聞社でも見られるが、一回限りの実施で終わっていることが多い。本研究のように、月に1回のペースで継続的に実施しているケースはない。それは、新聞社にとって、それだけ「子ども記者」に紙面を割くことができないという事情がある。逆に、それができたのは、地域との結びつきを強めなければならないローカル新聞社ならではの事情もある。洛南タイムス社は紙面改革の一環として、紙面を市民や行政に提供することを検討していた<sup>13)</sup>。

本研究は、紙面改革を検討していた洛南タイムスと市民活動を活性化させたい城陽市市民活動支援センターの思惑が一致したことにより始まった。本研究の取組は、少子高齢化や人口減少が深刻化する自治体の取組の一つのモデルになりうる。またそれは同時に、ローカル新聞社の取組の一つのモデルでもある。

城陽子ども記者クラブ（以下、城陽記者）と宇治子ども記者クラブ（以下、宇治記者）では、子どもの変容に大きな違いがあった。エレメントとしては、「知識と理解」はどちらも深まりが見られるが、城陽記者はさらに「価値と性向」に影響があったのに対し、宇治記者は「技能と才能」に影響が見られた。

それは、城陽記者と宇治記者には以下の違いがあったからと考えられる。

#### ① 地域の違い

宇治市の方が城陽市より面積、人口とも2倍以上ある。城陽市の方が一つの地域として認識しやすく、一体感を持ちやすい。宇治市の方は市域が広く一つの地域としては認識しにくい上に、世界遺産である平等院や宇治上神社がある中宇治地域と周辺地域では、観光客の来客に大きな差があり、町の雰囲気も大きく異なる。「宇治」を一つの地域として捉えるのは難しいという状況がある。

城陽市の方は、地域の良さが一般的には知られていなくて、取材活動を通して、城陽市の良さを知り、城陽市民としてのアイデンティティが形成され、「価値と性向」に影響が見られたと考えられる。一方宇治市の方は、世界遺産の平等院、宇治上神社や宇治茶など、宇治の良さが広く知られていて、新しい発見は少なく、「価値と性向」にはあまり変化が見られなかったと考えられる。

#### ② 募集形態の違い

城陽記者は、同じ学校の友達同士で集まってお

り、広く広報はしているが、知り合いによる声掛けにより集まった子どもたちである。一方宇治記者は、公募により、違う学校の子どもたちが集まってきた。城陽記者は、グループで活動し、思いを共有しやすい。したがって、「価値と性向」は影響されやすい。しかし、もともと新聞づくりに強い関心を持っているわけではなく、付き合いで参加している傾向もあるので、「技能と才能」にはあまり大きな変化は見られない。一方宇治記者は、個人応募で参加しているので、もともと新聞や新聞づくりに関心が高く、「技能と才能」に向上が見られた。個人的な活動意識が高いため、集団心理は働かず、「価値と性向」への影響は少ないとみられる。

研究の方法論としては、郷土理解や取材活動への意識がまちまちであった城陽記者は、ある意味、無作為抽出された不特定多数のサンプルを対象とする質問紙法の利点と見事に合致したアウトカムを示したが、もともとの理解や意識が高く、「少数精鋭」でもあった宇治記者へのアプローチとしては不十分であった。

以上のことから、本研究が目指す郷土愛を育むという観点からは、エレメントの「価値と性向」を高める必要があるが、そのためには、城陽記者のように、一体感を持ちやすい地域で集団による活動が効果的であることが分かる。

しかし、エレメントの3つの構成要素は関連しあっていることから、本研究の結果を踏まえ、3つの構成要素をバランスよく育むことができる子ども記者の活動をさらに検討していきたい。

#### 註

- 1) 改正教育基本法（平成18年）の第2条（教育の目標）5に「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養う」と記されている。
- 2) 洛南タイムスは、京都府南部、山城地方をエリアとするローカル新聞。発行エリアは宇治市、城陽市、京田辺市、久御山町、井手町、宇治田原町の6市町。
- 3) 市川正孝『「新聞教育」を創る』学文社、2013、p.35。
- 4) ロジャー・ハート著、木下勇・田中治彦・南博文監修、IPA日本支部訳『子どもの参画』萌文社、2000、p.184。
- 5) 橋本祥夫「社会参画能力を育成するNIE活動—総合的な学習における新聞づくりを通して—」

日本NIE学会誌第8号, 2013, p.10.

- 6) 中善規「地域ミニコミ誌づくりをととしたNIE－街の交信基地をめざして－」日本NIE学会誌創刊号, 2006, p.47.
- 7) QCA, Explanatory Notes of “The Importance of Citizenship”, *Citizenship Programme of Study*, QCA, 2007.
- 8) 質問紙の内容については、「郷土愛」ユニットのエレメントにおける3つの構成要素を意識し、プレとポストの「知識と理解」の深まり具合、「技能と才能」の向上の具合について比較・検討し、それらの記述内容から読み取れる「価値と性向」の変容とその総体が、「郷土愛」の醸成・涵養の度合いとして評価できるかについて検討する。質問項目は、対象者自身の基本情報（出生地・居住地、参加経験のある地域活動、応募の理由と活動の感想）、当該市に関する基本情報（地図上の位置）に加え、当該市の「良いところ」「好きなところ」および「悪いところ」「困ったところ」を可能な限り記述させ、かつ、その伸長や解決の方策までを問う。
- 9) これまで5回実施した。なお、第6回以降、コミュニティバス、地場産業等をテーマとした取材を計画している。
- 10) これまで5回実施した。なお、第6回以降、宇治茶生産農家、製茶工場など、宇治茶の生産に関する取材を計画している。
- 11) 通圓茶屋は茶人通園が宇治橋の東詰めで茶を売っていた店で、創業は平安時代末永暦元年（西暦1160年）である。現在の当主は24代目であり、当主に直接取材した。
- 12) 朝日焼は、宇治川をへだてて平等院をのぞむこの景勝の地で、慶長年間（1596～1615）に開窯したと伝えられている。現在の窯元は15世であり、窯元に直接取材した。
- 13) 上越タイムスはNPOや行政に紙面提供をし、経営危機から脱し急成長した。畑中哲雄（2014）『地域ジャーナリズムーコミュニティとメディアを結びなおす』勁草書房、を参照。